

C-53 衿の平面製図(第2報)衿つけ線についての考察

県立新潟女短大 平沢和子

目的 衿は他の部分に比べ最も装飾性の高い部分であるが、立体裁断と平行して人体因子、素材因子をもとに理論的な平面製図がすすめられるべきである。複雑な頸部形態によくフィットしながら更に創造性を加え構築してゆく衿の製図法を目ざして、衿を構造上3種に分類し、最も基本体である Stand Collar の製図を人体因子、運動因子、素材因子を根拠にして、すでに発表した。製図に際し衿が位置する頸部をネックラインによって区切られた前頸した円錐の一部と仮定し、ネックラインによって囲まれた頸部形態を楕円の集まりとして展開したが真円と仮定しても、ほぼよいパターンが得られると結論した。今回はこの仮定した人体因子について更に検討を加え、結果を製図に表現しようと試みた。

方法 ネックラインの位置から4cm上部までの頸部角度及びネックラインによって囲まれた形態の観察、計測は試作した頸部角度計、スライディングゲージ(横断)写真計測(焦点距離130mm)、石膏及びFRPによる体形の復元によった。今回は1個体について行った。

紳士服技術者による衿ごろしの手法を分解し、そのパターンの変化を調べた。

結果 次の2点について考察する。(1) 頸部角度と衿角度の関係及び衿角度を引き起す衿つけ線カーブについて。(2) ネックラインによって囲まれた頸部形態は大きくわけて2面によって構成される。これを身体への適合の一因子と見なし、衣服との関係を設定し、衿つけ線の変化の説明を試みる。